

まいたいさ

川柳



セイヨウミツバチ

令和3年(2021年)
10月号 (No.743)

日川協加盟

卷頭言

ペストといふこと

新型コロナによる世界的な地獄図は、過去の疫病発生図の延長にある。日本も同様である。歴史を読まない国民に、切実感はない。カミュが著した「ペスト」は、現実にヨーロッパの小都市で发生了ペストの蔓延事態を舞台とする小説である。罪のない人々が死んでゆく。町の封鎖を始めとする行政の各種対策は後手に回る。主人公の医師は、周りの多様な人間像と交わりつつ苦悩する。平和という安全地帯に生き馴れている日本人も、この小説が語る生々しい怖さを読むことで、改めて思い付くのではないか。

不安定な経済状況や医療従事者への負担増が、社会の沈滞と政治の不信を招く。善人も悪人も、不安と樂觀の間に揺れ動く。そして罪なき者が次々と罹患し、行政の手立ての不条理が際立つてくる。強権発動も虚しく空回りする。中世的な市街構造であれば有効な都市封鎖も、近代の地政学的な構造で遠距離移動が自在な交通網が存在する限り、効果は薄い。国民の心が一つに結集しない限り、移動自粛や禁止の呼び掛けなどは、全くの雑音でしかない。

「ペスト」では、人間の根本的な不条理に目覚めた人々を描きながら、極限の中で誠実に職務を果たすことを訴えている。そして、小説は締めくくる。「知つてゐる・・・ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもなく・・おそらくはいつか・・再び鼠どもを呼び覚まし・・差し向ける日が来るであろうことを。」(宮崎嶽雄訳)

願法みつる

日日是好

ウイルスもカラースモーク自在とか他人様を責める論理を日で換えるでつち上げられた悪者も泣いて木偶また苦惱百才論の是々と非々

激辛の担々麺にある思想

あの世へ手形蕎麦の一杯

久しく会わぬアナタあなたか何処へでも跳ぶウソもココロも手帳ペラペラ白紙ばっかり

龍の巣籠もり恋を忘れる